

小田和正

Oda Kazumasa

Text / Makoto Hasegawa Photo / Ko Hosokawa

音楽は自分が選んだもの。

その音楽に何もないってことはない

強く思っている。



音楽が持っている力はとてつもない。
一瞬にして、その曲を聴いていた過去に
連れて行ってくれる。



新しい武器を持って、
勝ちにいきたい

2014年は精力的に全国ツアーを展開。繊細さと強靱さを備えた伸びやかな歌声が胸を揺さぶる。歌を届けるんだという強い意志と熱い思いも伝わってくる。こんな67歳そうはいない。このパワーはどこから来るのだろうか？

外で寒いのに、来てくれているんだから、客席の一番後ろまで花道を作ろうってことになり、やったら、みんな、ホントに喜んでくれて(笑)。そんなにうれしいの？ってくらい(笑)。こんなに喜んでもらえるなら、どんどん行くべきじゃないかと。近づくこと、こっちは発見があるわけ。そうか、若い子は親に連れられて来てるのかとか、このおっさん、どうして来てるんだらうとか(笑)。

——ライブをやる楽しみ、醍醐味はどういうところにありますか？

——ライブで歌う時、大事にしていることというと？

自分としては、コンサート、楽しいよね。ってところからはスタートしていないんですけど。みんなが待っていてくれる場所に行くと、歌ったら、みんな喜んでくれて、結果として、オレも楽しいや。ってことになるんだけど、やる前はみんなが楽しんでくれるだろうかって不安がまずある。パターン化したステージはやりたくないし、新しい武器を持って、勝ちにいきたいわけじゃない？ 武器って曲しかないから、その準備がまず大変で。戦えない武器を持っていてもしょうがない。

ピッチのことを考えて歌ってる。ちゃんと歌わないと、マイナスされることが多くなって、届かなくなるから。自分もうまく歌えた時のほうが次の曲に乗っていきやすいね。心を込めて歌っても、入れ込みすぎると、2日目は同じふうには歌えないし、続けることで演じ始めるのは嫌だから。毎回、まっさらなところから始めよう。

これはいいフレーズが書けたんじゃないかなって自分の感覚を頼りに曲を作っていくけれど、リハーサルが始まって不安はぬぐえない。お客さんに馴染み深い曲をやれば喜んでくれるけれど、そういうやり方ではなく、新しい曲で喜んでもらいたいわけだし。今回のツアーは、新たに作ったオリジナルアルバムを全部やるというところで、自分としては勝負だったから。

——それって、すごいことですね。
疲れますね(笑)。まっさらってことは保証されてないってことだから。盛り上がりを作っていくはずだから。信じてスタートするけれど、大丈夫かなって、毎回、不安との闘い。

——実際にやってみての手応えは？
みんなの前でやると、スタジオでやる音像とはまた違う感じになって、アルバムを作った時点から先に進んでいくイメージがあった。お客さん、喜んでるな、良かったなって。

——歌声、伸びやかでタフです。でもトレニングはしてないんですよね。
特別なことはしてない。こんな高音、ライブで出ることって思うんだけど、お客さんの前に出ると、あつという間に出る。アドレナリンの作業だな(笑)。

——忘れていないことを

伝えることが大事だなと思った

——ライブ中に客席の中に入っていくって盛り上げる場面があります。以前はステージを降りなかつたと思うのですが、いつ頃から始めたのですか？

——新作『小田日和』にはシンプルでありながらも、聴き手に寄り添ってくる曲がたくさん入っていますが、曲作りの意識で変化した点は？

最初にやりだしたのは21世紀になる時に八景島でやった年越しライブ。野

——ライブ曲の場合は、オレに求めるイメージがあった上で頼んでくることが多いじゃない？ そこで裏切ってしまうようなないので、期待に沿って、書いていくわけ。それはそれで嫌い

「聴きに来てくれる人がいるうちは歌え！」
って言われて、
ああ、そうかってちょっと納得した。



じゃないし、作業も進むし、アルバムを作る上でも助かるんだけど、それほどぼつかりもどうかなくて。たとえば、「ラブ・ストーリーは突然に」みたいなのがオレの作風だと思われているけれど、自分が音楽を好きで始めたころに求めていたものは違うわけで、ずっと遡ると、こういう曲が好きだったんだってところに行き当たったんだよ。

—— こういう曲というの？
スタンダードっぽい曲。当時はそういう曲がどんな構造、コードなのかわからずに聴いていたんだけど、今、振り返ってみると、こんなふうになってたから気持ち良かったんだなって発見がある。で、ポール・サイモンやP.M.がやってたようなシンブルな音楽を自分の手でも作りたくなった。オフコース時代、軟弱だってさんざん叩かれて、ロックっぽい方向へ行った時期もあったけど、今は自分のイメージした曲を作りたい気持ち強い。

—— 新作から70年代A&Mやバカラックに共通する匂いも感じました。
バカラック、いいよね。ライブを観たら、すげえ良かった。スタンダード的な大人っぽい機微ってあるじゃない？ ちょっと距離を置いた感じ。自分もそういうのを作って歌いたいな。

—— 「その日が来るまで」のように震災を踏まえた曲も入っていますが、震災が起こって、どう感じましたか？
多くの人がそうだったように、無力だと思えばかりだった。そんなことを考える間もなく、現地へ行って体を動かした人たちもいたけれど、オレは何もできなかったし、何をすべきなのかも判断できなかった。ツアーが予定されていたので、やめちゃいけないんじゃないか、お客さんが来てくれるならやろうって、数か月遅れて、長野からスタートした。初日のMCは緊張したね。ライブで盛りあがっているのか、笑顔になっていいのか、いろんなことが頭に浮かんだし。でも被災していいところ

—— 「その日が来るまで」はどんなきっかけから生まれたんですか？
「元気出して」とか「頑張ろう」とか「見守ってる」じゃないなって。常に見守ることなんてできるわけないし、一番つらいのは忘れられることじゃないかと思って、「君が好き」という言葉に思いを託して作っていった。泣いてるお客さんがいると、ありがたけれど、そこまで背負えないって思ったりもするんだけどね。

—— 音楽の力ってすごいなって感じる機会も増えた気がします。
音楽って不思議なもので、自分がめり込んでいった時のことを考えても、すごい力があると思うね。昔の曲を聴いた時、一瞬で過去の瞬間に戻れるでしょ。あれはすごい力だと思う。

—— 歌い手として、音楽の素晴らしさを感じる瞬間は？
楽屋で気の知れたアーティストと一緒に「あの曲、こうなってるんだな」って声を合わせて歌うのは楽しいね。それが原点。ベースのネーサン・イーストとバカラックで一番好きな曲はなんだった話になって、ふたりとも「One Less Bell to Answer」を挙げたんだよ。

—— 「お前、なんでそんな歌、知ってるんだ？」って。その曲が70年ころのアメリカの刑事物のドラマで使われていて、フィフス・デイメンションが歌うシーンが出てくるんだけど、あいつもそのシーンを知ってて、同じようにこの曲にたどり着いたことにびっくりした。

—— 音楽は国境を越える、と言うけど、歌詞のないものとは何か、あるものはどう簡単に国境を越えないぞとオレは思っていたからね。でもその時は一緒に歌って盛りあがって楽しかったね。

最近、仕事をリタイアした同級生を観察している

—— こんなに精力的にツアーをやっている同年代はそうはいないと思うのですが、引退を考えると？

仕事をリタイアした同級生がいつばいいるから、楽しく生きてるか、観察してるところ(笑)。やることなく寂しいとか、全然問題ないとか、いろいろ説がある。オレはどっちかなって。

—— どっちだと思えますか？
オレは辞めても平気なタイプだと思う(笑)。ゴルフやったり、空を眺めたり、スタンダード聴いたりして過ごす。

—— 曲を作りたくなるのでは？ それにライブを待っている人がいるし、辞めるタイミングはないのでは？
医者をやっている先輩がツアーを観に来てくれた時に今後の話になって、「医者、いつやめるの？」って聞いたら、「患者が来るうちはやる」って言うわけさ。

—— 「お前も聴きに来てくれる人がいるうちは歌え」って。ああ、そうかってちょっと納得したんだけど。
—— 小田さんにとって音楽とは？
音楽は自分が選んだものという意識が一番強いかな。小学校から大学まで、音楽とは違う勉強をしていて、それを辞めて、なんのあてもなく音楽を選んできたわけだから。

—— それだけやりのあるものだということなんですよね。
加藤和彦さんが亡くなった時、「音楽には何もなかった」という言葉を残している。先日、吉田拓郎と話す機会があったんだけど、「あれだけのものを残した加藤さんがそんなことを言うなんて、寂しいなあ」って。音楽をどうとん追求したからこそ、音楽は夢のようなものというニュアンスであんな言葉になったのかもしれないけど、オレも拓郎も同じ気持ちだった。「音楽には何もないってことはないよね」って。そこは強く思っていますね。

PROFILE シンガーソングライター。1947年9月20日生まれ。神奈川県横浜市出身。1970年にオフコースとしてデビューして1989年に解散。その後、ソロ活動を本格化。ラブ・ストーリーは突然に「キラキラ」などヒット曲多数。2011年〜2012年の全国ツアーで国内ソロアーティスト歴代最多動員数記録を更新。2014年7月、最新アルバム『小田日和』発表。10月にツアーを終えたばかりだが、2015年1月から追加ツアー「KAZUMASA ODA TOUR 2014〜2015」開始予定。

A man in a grey sweater and dark pants stands on a stage, holding a microphone to his mouth. He is positioned on the left side of the frame. A large, bright spotlight illuminates the right side of the stage, creating a strong contrast with the dark background. The stage floor is dark, and there are some faint lights visible in the distance.

小田和正

ロングインタビュー